



IFPaT共催の国際シンポジウム
(2014年12月ハノイにて)

イフパット だより

～農民参加なくして農業なし～

特集：イフパットとベトナム

—JICA草の根技術協力が採択される—

NPO便り第15号に寄せて：
「イフパットだより」は、第1号から第13号全て辻本壽之理事の手で作成されてきました。辻本理事が亡くなりましたが、辻本の意志を汲み、今後とも継続してニュースレターとしてNPO活動の様子をお伝えします。

* IFPaTがベトナムの協力案件を2件受注したので、ベトナムとの特集を企画してみました。これら2案件の実施に先立ってJICA技術協力「持続可能な農村開発のためのタイバック大学機能強化プロジェクト」のチーフアドバイザーであった理事の西村美彦の貢献が大きかったです。また、彼の尽力により昨年12月5日-9日にベトナムで国際シンポジウムを開催することが出来ました。また、ベトナムの協力案件実施に当たっては、理事の桜井のベトナムへの特別な熱い思いが原動力となっています。彼の数奇な人生を紹介します。

編集文責：狩野 良昭

茨城県笠間市が提案自治体として当NPO法人が事業実施団体となってJICAに提案した「中山間地域における農業活性化による農家生計向上事業」が7月に正式採択されました。現在ベトナム国側実施自治体などとの合意書作成に向け準備を進めています。IFPaTとしては、初めての草の根技術協力を実施することになります。又、青年研修「ベトナム農村振興」も受託しました。昨年12月には当NPOの理事西村美彦がチーフアドバイザーとして指導に当たってきたタイバック大学との共催で国際シンポジウムを開催して以来、ベトナムとの関係が深まっており、今号ではその活動内容をお知らせします。ベトナムでの活動にあたっては、理事の桜井文海の祖国ベトナムへの思いが大きな原動力になっています。彼の数奇な人生を紹介します。

ベトナム ソンラ省におけるJICA草の根技術協力事業

(地域活性化特別枠) の実施に当たって

理事 西村 美彦

笠間市は、IFPaTの企画・助言を踏まえて、平成26年度補正予算によるJICA草の根技術協力事業（地域活性化特別枠）に応募しました。

6月末に、提出した技術提案書が採択された旨の連絡を受けて、プロジェクトが開始されることになりました(正式採択は7月)。プロジェクトの名称は「ベトナム中山間地域における農業活性化による農村生計向上事業」というもので、笠間市と連携を図りながらIFPaTと現地協力機関であるソンラ省にあるタイバック国立大学とが中心になって実施することになります。地域活性化のモデルとして、ソンラ省の2村を選定し協力が行われます。草の根技術協力事業が開始されるのに先行して、8年前にソンラ市に設立された国立タイバック大学農林学部の支援のため、JICAの技術協力プロジェクトが2014年12月までの4年間に亘り技術協力を実施されました。(このプロジェクトアドバイザーとして西村が参加)。この成果を踏まえて、大学としては社会貢献(アウトリーチ・プログラム)を目的とした農民に実践できる技術協力を実施したいとの希望を有しています。

ソンラ省はハノイから西約300kmに位置している標高700mの中山間地域で、交通の便が悪く、車で8時間かかる典型的な地方の農村地域です。ベトナム経済が発展する中で、都市部との格差是正のため、この地域の農村開発が求められています。このため、ソンラ省では農業農村の開発に力を入れおり、大学と協働で農村開発を進める検討が行われていました。その検討の中から、JICAの草の根技術協力事業により、国際交流により進めようとする方向になりました。

目次

- ・ 特集イフパットとベトナム ・P1-3
 - ・ベトナム ソンラ省におけるJICA草の根技術協力事業の実施に当たって 西村 美彦
 - ・青年研修「ベトナム農村振興コース」について 西村 美彦
 - ・ベトナムでの国際シンポジウム 西村 美彦
 - ・ベトナムと私 櫻井 文海
- ・ 理事の西村が学会賞受賞・・・P4
- ・ ベトナム料理を食す ……………P4 狩野 良昭

ベトナムは、現在安全安心な農産物生産に対するニーズが多く、これを生産する農民への技術移転が求められています。ベトナムでもすでにVGAP(ベトナム版農業生産工程管理)が実施されているものの、信頼度が低く十分な機能を発揮していません。他方、農村では生産物を高値で売りたいという願望があり、ブランド化を模索しています。これらのニーズを結びつけるシステムが構築出来れば農村の発展につながります。これはちょうど、現在の日本の農村開発の実践経験が生きるわけで、笠間市の実践経験が、国際交流も含めソラの農村に移転出来る期待があります。

茨城県は、ベトナムとの農業協力を積極的に、今年すでに県農林水産部案件としてJA茨城県中央会がハノイ市とハノイの南約150kmのナムディン省で近郊野菜の生産についての草の根技術協力を始めました。ソラ省はちょうど反対方向の北西の山間地で、農業県の茨城としては異なる2か所の地域で農業農村開発技術協力を実施することになります。

又、茨城県は、半世紀前にJICA筑波国際センターの前身になる内原農業研修センターが日内原町、友部町で海外の農業研修員の受け入れを実施した所で、農業の国際協力の発祥の地でもあり、農業協力和深い縁があります。

ソラ省、笠間市とは、地形的にも中山間地帯に位置するという類似性を有し、相互に交流できる要素があります。それぞれの農産物生産あるいは販売加工の分野の交流が図られ、双方の地域活性に貢献できればと思っています。

ハノイからソラまでは国道6号線で行かなければなりません。東京と笠間間も国道6号線で結ばれています。共に国道6号線で首都と結ばれているという共通点の縁もあるのかと思っています。

本協力を通して、今後ソラ省の農民と笠間市あるいは茨城県の農民との交流に本プロジェクトが貢献できればと思っています。



協力対象地域の農家

2015年度青年研修

「ベトナム農村振興コース」を受託

理事 西村美彦

2015年度から始まる青年研修「ベトナム農村振興コース」がJICA筑波センターから公示された。IFPaTとして、すでにベトナムにおける草の根技術協力プロジェクトが平成16年から開始される予定であり、ベトナムに関する知見が豊富であることから、応募したところ採択となった。

実施においては、草の根技術協力を係わる桜井、西村をリーダーとし、有機農業、野菜栽培等の課題などについては、他のIFPaTメンバーも協力し運営していく方針である。

青年研修事業とは、開発途上国の将来を担う青年層（20歳～35歳程度）を日本に招き、それぞれの国における開発課題について日本の経験、技術の基礎的理解を付与する研修を行うことを通じ、将来の国づくりを担う人材の育成することになる。

研修においては、農業生産性の向上に加えて、農産物加工業等の農村部の地場産業育成、観光開発、自然資源の活用等、農村部の生計手段の多様ななどの課題を広くカバーする内容となる。また、草の根技術協力プロジェクトの実施で協力関係が深まった笠間市、茨城県、JA茨城中央会とも連携を図り、効果的な研修を実施する予定である。

今年度は17人の研修員を10月18日から11月3日まで受け入れる計画。

ベトナムでの国際シンポジウムの開催

理事 西村美彦

JICAベトナム事務所からタイバック大学機能強化プロジェクトが2014年12月20日に3年10ヵ月のプロジェクト協力が終了するのに当たり、最後のまとめとして研究成果を国際シンポジウムを開催し発表して欲しいと要望された。IFPaTは活動の一つとして、毎年国際シンポジウムを開催していることもあり、タイバック大学（T B U）と共同でハノイにおいて国際シンポジウムを開催することにした。

開催日は12月5日～9日で、最初の1日半は研究発表、そのあと6日はV N U Aの見学を行った。さらに、7日～9日はエクスカージョンとしてソラまで移動し、T B U関係の農業視察を行った。ハノイに帰る途中にV F Uを訪問し校内の視察を行った。

参加者はT B Uスタッフ、日本側国内支援委員、

JICA 専門家、JICA 職員、ベトナム支援大学 (VNUA, VFU)、IFPaT 関係者 (日本、スリランカ、タイ) などとなり、延べ50人となった。

TBU 農林学部からは7課題の研究について発表を行った。英語での発表の経験のない中で講師陣が頑張っ て練習した甲斐あって、立派な発表であった。質に対しては、通訳を付けたので十分なディスカッションが 出来た。



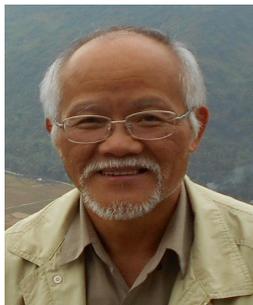
シンポジウム参加者との集合写真

ベトナムと私(生い立ちから 現在まで)

理事 櫻井 文海



ベトナムで生まれ、高校卒業後 1970年1月末に、ベトナム (その 時南ベトナム) 国籍でラムバン ハイの名前で来日しました。1 大学卒業時(1975年)の私 年間日本語学校で日本語を学び、東京農業大学で 4年の修業したところ(1975年4月)、ベトナム戦争が 終結し母国がなくなっていました。ベトナム戦争後 1975年~1985年までは、無国籍で人生を過しまし た。そして、1986年、日本国籍を取得、櫻井文海とな りました。それからもう45年過ぎました。学生時代から就 職、退職までの人生においてい ろんな友人・先輩・同僚特に先生 方々から農業機械技術・日本で の生活マナーなどを指導いただき、充実した人生であることを、心 から感謝しております。大学卒業 後の人生は次の通りです。



現在(2015年)の私

- * 1975年、東京農業大学農業 工学科農業機械専攻 卒業
- * 1983年、九州大学大学院 (農学部農業工学科 農業機械

* 1983~2005年(22年間)、財団法人国際協力セ ンター (JICE) の研修指導員として、JICA筑波国際 センター (TBIC) の農業機械研修分野において日本 の高度技術を応用した農機具の設計・試作・改良・性 能試験方法、農業機械用歪ゲージ理論解析・応用方 法や太陽エネルギー利用穀類の乾燥技術等を指導し た。

* 2006年2月~2011年5月 (5年間)、(有) アールディアイ 主任研究調査員となり、2006年~ 2008年の2年間ブータン王国農業省農業局農業機 械センターにてJICA個別専門家及び2008年~2011 年の3年間、同農業機械センターのJICAブータン農業 機械強化技術プロジェクトのチーフアドバイザー。この 間、地域農民支援サービスユニット体制、農業機械セ ンターの研修システム、品質管理評価及びブータンの農業 機械適正技術開発研究を行い、現地においてそれらの 検証のための性能特性実験を実施した。特に、耕うん・ 播種・移植・脱穀機等に関する機械開発研究方法を 明らかにした。また、農村開発を強力に推進する上で、 農村の生活改善や農業経営・農業技術等に関する各 分野で指導役割を担う農業普及制度確立の必要性と 具体的な活動システムも明らかにした。

* 2011年~現在、NPO法人IFPaTの理事 以上の経験を生かして、農業生産・農産加工・農産物 流通・農業機械の分野において開発途上国の援助・技 術移転や人材育成及び日本~ベトナムとの協力に貢 献することを希望している。今後の櫻井文海 (サクライ ハイ) の第二の人生に対して皆様からいろいろご指 導・ご鞭撻などを頂ければ幸いと存じます。



写真：1992年12月、ベトナム農業工学・ポストハーベスト 研究所 (VIAEP) 所長ラン博士 (現ベトナム農業省ア ドバイザー) 及び農業省次官ホアン博士 (故人) と連携で ベトナム農業機械学会を創立した。その年から現在まで、 2年毎にベトナム国際農業機械学会を開催している。

IFPaT理事の西村美彦氏が学会賞受賞

日本国際地域開発学会25年度春の大会が5月30日、日本大学生物資源科学部開催され、IFPaT会員の理事の西村に対し学術賞の授賞式が行われた。業績は「熱帯アジアにおける作付体系技術」で、熱帯アジアの各地の作付体系の研究から集約的作付体系技術を導きだしたことが受賞対象となった。



ベトナム料理を食す

理事 狩野 良昭

IFPaTの関係でベトナムに行くことが多くなってきた。ベトナム案内の一端としてベトナム料理を紹介したい。

ベトナム料理を、南北地域、都市・地方を問わず、どこでも美味しく楽しんだ。ベトナム料理については、大方の人が「中国料理ほど油っこくなく、タイ料理より辛くなく、さらにフランス料理の洗練さが加味され世界一の料理」といわれているが、それに異論はない。限られた期間のため、食した数は限られるが、印象に残ったおすすめの料理を2 - 3紹介する。まずは、筆者の好物の麺類。



鳥団子入りトウガラシ風味のフォー



塩薄味のフォー（日本式では塩ラーメン）

フォーは、町の小さなレストランで朝から夜までいつでも食べられる。火を通してあるのでお腹を壊す心配はないので安心。塩味が抑えてあり、自分の好みで味付けを調整できるのが嬉しい。なお、ベトナムでは食卓に胡椒はおいていないので、日本式に胡椒をかけたいと思う人は胡椒を持参することを勧たい。



次に楽しんだのは、鍋料理。写真にあるように、トマト、カンコンなどの野菜と、豆腐、魚がたくさん入った栄養豊富な鍋料理。味付けは、材料の味を生かそうと塩の薄味が多い。残った汁にフォーを入れて、最後の締めを行うのも最高。鍋は、写真右のようにたくさんの人と和気藹々と食べられるので、仲良くなるのに効果的。



最後は、庶民の食べ物。安価で野菜豊富な定食。屋台に入ったら注文しなくても自動的に出てくるので便利。ベトナムの人は、本当に野菜というか葉っぱを食べる。それも生のサラダで。我が家の庭の問題雑草のドクダミ（箸で示している。）もベトナムの人にとっては、重要な野菜。ベトナムに行って、改めて考えたのは、毒でなければ草や木の葉は全て人間の食べ物になるのだという、古代の人々の食のありよう。

「IFPaTだより」に関する照会・連絡先

NPO法人国際農民参加型技術ネットワーク（IFPaT）
〒300-1241 茨城県つくば市牧園5-13-203
TEL: 029-875-4771 E-mail: info@npoifpat.com
ホームページ: <http://npoifpat.com/>